

現代日本の博物館建築における導入空間まわりの用途の複合

安田研究室 08_06170 小野 裕子 (ONO, Yuko)

1. 序 近年、博物館の機能は学術資料や美術品等の収集・保存・研究・展示という本来の基本的な用途の他に、購買・飲食等といった博物館施設での行為をより豊かにする用途が付加される傾向がみられる。来館者それぞれが博物館の利用の仕方を自由に選択することができるように、これらの用途が入口からエントランスホールを経て展示室へ至るまでの導入空間^{註1)}に複合的に配置されることが多い。そこで本研究では、現代日本の博物館建築^{註2)}を対象に、来館者の多様な行為に対応し得る、用途の複合形式の特徴の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 導入空間の形態 まず、導入空間の平面形を分類し、そのうち単一は、平面形の短辺が3m以上の広間、3m未満の廊下に分けて捉えた(表1)。これら広間と廊下の組合せである結合が6割以上(52/79)を占めた。次に、断面形を分類し(表2)、導入空間が単層のみのものが、吹抜を介して階によって分節された複層よりも、多くみられた(48/79)。これらの平面形と断面形の組合せから、導入空間の形態を3つのパターンに分類した(表3)。単層単一型は単層の断面形と単一の平面形との組合せであり、平面、断面のいずれにも分節をもたないものである。単層結合型は、平面のみに分節をもつものである。複層型は階による分節と吹抜を介した断面的な広がりをもつものである。さらに、単層結合型と複層型について、入口との位置関係から、入口と同階で最も近い広間までを前領域、その他の領域を奥領域として捉え

た。単層結合型では広間から入り、廊下が結合して奥領域をつくるものが大半(22/79)である。複層型では、単一の平面形の積層は少なく、広間を前領域として、吹抜を介して他階の奥領域につながるものは多くみられた。

3. 導入空間まわりの用途の配置 まず用途を展示と飲食等の付加用途に分類し、図面表記から抽出した。導入空間内にあるものを内包、導入空間に接続した室にあるものを隣接とし、導入空間まわりの用途の配置^{註3)}として整理した(表4)。展示は約6割が導入空間まわりに配置されず、付加用途に比べ導入空間まわりと区別される傾向が強い。付加用途は導入空間まわりにあるものがいずれも半数以上を占め、特に購買と情報はその傾向が強い。さらに購買と休憩は内包が多く、学習は隣接が多い。次に、展示と付加用途の配置を内包と隣接の組合せから捉え、5つのパターンに分類した(表5)。用途なしが極めて少なく(5/79)、導入空間まわりに展示または付加用途を必ず配置する傾向がある。その内、用途を内包するものが過半数みられた(50/79)。

4. 導入空間まわりの用途の複合形式 前章までの形態パターンと用途の配置パターンを併せて検討し、導入空間まわりの用途の複合形式として8つの類型が得られた。①②③は用途の配置が隣接のみという、用途を内包せず、間接的に配置するものである。①は形態が単層単一型のものである。特に、展示のみが隣接するものが半数みられることから、展示のための前室としての性格に特化するも

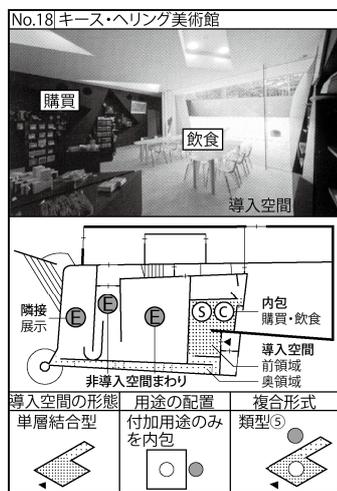


図1 分析例

表1 導入空間の平面形

単一	27	結合	52
広間	24	廊下	3
		広間+廊下	

表2 導入空間の断面形

単層	48	複層	31
----	----	----	----

表3 導入空間の形態パターン

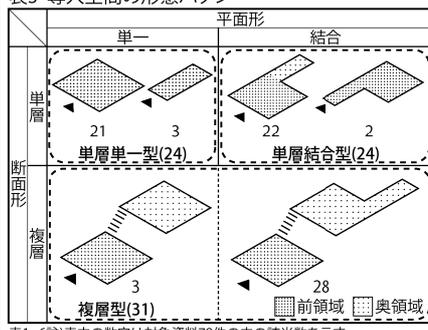


表4 導入空間まわりの用途と配置

用途	展示 E (162:208)	付加用途 (163:118)					281
		購買 s 44	飲食 c 48	休憩 r 58	学習 l 87	情報 m 44	
図面表記	展示室 ギャラリー	ショップ 売店	カフェ レストラン 喫茶室	ラウンジ 休憩室 休憩パ ース	講堂 ワークショップ ホール	図書コー ナ情報コー ナ	
導入空間	内包	58	22	13	20	4	15
まわり	隣接	104	12	14	9	42	12
非導入空間まわり		208	10	21	29	41	17

表5 導入空間まわりの用途の配置パターン

	付加用途 ○			
	なし	隣接	内包	内包+隣接
内包+隣接	0	2	7	6
内包	5	3	2	4
展示	展示のみを内包 (10)		展示と付加用途を内包 (19)	
隣接	7	8	8	10
なし	5	9	2	1
	用途なし (5)	内包なし (24)	付加用途のみを内包 (21)	

表1~6註)表中の数字は対象資料79件の内の該当数を示す。
表4註)表中の0内の数字は(導入空間まわり:非導入空間まわり)の該当数を示す。

のといえる。②は単層結合型のもの、③は複層型のもの
 であり、平面や断面での分節をもち、動線のための空間
 に間接的に用途を配置するものである。④⑤⑥は付加用
 途のみを内包するものである。④は形態が単層単一型
 のもので、①と同様に展示のみが隣接するものが過半数み
 られた。また、内包する付加用途の種類には偏りがみら
 れない。⑤は単層結合型のもので、前領域に付加用途を
 内包し、奥領域に展示を隣接するものが多い。休憩また
 は購買をもつ前領域に対し、奥領域が展示のための前室
 としての性格を帯びるものといえる。⑥は複層型のもの
 である。付加用途を領域の区別なく内包し、展示を隣接
 するという、展示と付加用途を分けて配置するものが多い。
 ⑦は展示のみを内包し、形態が複層型のものである。
 ⑧は展示と付加用途を共に内包し、複層型のものである。
 展示といずれかの付加用途を同じ領域に共存させ、前領
 域には展示、購買、休憩のいずれかを内包し、奥領域に

は展示を内包するものが多い。さらに、これらの類型間
 にみられる特徴として、①～⑥には展示のための前室と
 しての性格があり、多様な形態との対応がみられる。一
 方、展示を内包するものには⑦⑧という断面的分節をも
 つ形態パターンのみが対応する。特に、展示と付加用途の両
 方を内包する⑧は、用途の複合と形態的分節のいずれも
 最も重層する形式であり、一方、①は最も単純な形式で
 ある。これらの該当数が多いことから、両者の対照的な
 関係を主たる形式として位置づけることができる。

5. 結 以上、現代日本の博物館建築を対象に、導入空
 間まわりの形態と用途の配置を検討した。単純な形式と
 重層的な形式という対照的な関係が主な類型に見いださ
 れる等、用途の複合形式の特徴の一端を明らかにした。

注1) 入口と動線的に連続し、平面的には室または壁を境界とし、断面的には吹抜を介してひと続きとなる内部空間を導入空間と定義する。
 注2) 本研究では、『新建築』誌に2000年1月号から2011年12月号までに掲載された美術館、博物館、記念館建築の内、ギャラリ等の小規模なもの(延床面積500㎡以下)を除いた79作品を分析対象とした。
 注3) 導入空間まわり以外で敷地内にある用途を非導入空間まわりの用途として抽出した。

表6 導入空間まわりの用途の複合形式

		導入空間の形態パターン		
		単層単一型(24)	単層結合型(24)	複層型(31)
用途なし(5)	39 地中美術館 44 神奈川県立近代美術館葉山 79 河口湖UKA(河口湖)の森美術館	- - - - - - - - -	4 龍谷ミュージアム 49 まつたい雪国農耕文化村セター	- - - - - - - - -
	① (10)	31 香川県立東山魁夷せとうち美術館	12 ハリスミュージアム7-ク 55 兵庫県立美術館 60 国立近代美術館 78 東京国立博物館平成館 46 石川県西尾幾多郎記念哲学館 73 馬頭町広重美術館 28 時雨殿 42 鈴湊南山美術館 48 菊池寛美記念智恵美術館	60 国立近代美術館
	② (9)	24 青森県立美術館 31 香川県立東山魁夷せとうち美術館 63 東京大学博物館 小石川分館 69 霧島アトール 64 平等院宝物館 鳥羽館 13 十和田市現代美術館 14 国立科学博物館 36 富弘美術館 68 茨城県陶芸美術館 76 なにわの海の時空館	18 キー・ス・ヘリツグ 美術館 27 真下慶治記念美術館 35 平山郁夫氷川町美術館 17 横須賀美術館 25 秋博物館 38 金沢21世紀美術館 72 敦賀ミュージアム 25 長崎歴史文化博物館	56 千原美術館
	③ (5)	71 ベイ・スタジオ 下田 15 沖縄県立博物館・美術館 8 香川県立一支部博物館 57 松本市美術館 65 ミヅノくおかがり館	6 岐阜美術館 9 世界遺産熊野本宮館 59 安曇野ちひろ美術館 75 石の美術館 1 東大寺総合文化セター 16 坂の上の雲ミュージアム 52 ちひろ美術館東京	57 松本市美術館
	④ (7)	2 経井沢千住博美術館 5 豊島美術館 20 三重県立熊野古道セター	58 TRIAD 7 鶴岡市立藤沢周平記念館	53 グアッパ 彫刻庭園美術館
付加用途のみを内包(21)	74 みちのく風土館	10 根津美術館	53 グアッパ 彫刻庭園美術館	
展示のみを内包(10)	10 根津美術館	11 星野哲郎記念館 47 安曇野高橋節郎記念美術館 61 群馬県立館林美術館	53 グアッパ 彫刻庭園美術館	
展示と付加用途を内包(19)	10 根津美術館	11 星野哲郎記念館 47 安曇野高橋節郎記念美術館 61 群馬県立館林美術館	53 グアッパ 彫刻庭園美術館	

